



●スタックスのパワーアンプの歴史は1974年のDA-300から始まったと言って良いと思いますが、当時のアンプ界に新風を吹き込んだ製品として今でもご記憶の方が多くいらっしゃいます。何ごとも人まねで無く、本質を究めた製品を——と日頃から心掛けているスタックスでは、いつもユニークな発想を大切にしてきましたが、この度のパワーアンプもそのような土壌に生まれた製品といえましょう。アンプの中でもパワーアンプは特にその電源部が大切である事はスタックスのアンプを見て聴いていただければおわかりだと思いますが、特に今回のDMA-X1はこの電源部に重点をおいて開発されました。まず磁気抵抗の少ないトロイダルコアを持った大型(1760VA)の電源トランスを+/-に各1個、さらに大型チョークをやはり+/-に各1個、それに大容量ケミコン10万マイクロを4個とぜいをつくし連続電力供給能力を充分以上に持たせました。もち論配線材もPC-OCCやLC-OFCをフルに使用しています。DMA-X1の特徴はもち論電源部だけではありません。出力段のデヴァイスにもご注目いただきたいとおもいます。一般にパワートランジスターはバイポーラ型が多用されていますが、これは多量に作られていて性能のバラツキが少ない為です。しかし音質の面からみるとMOS-FETに一步譲るといってさしつかえないでしょう。スタックスでは数々の試作を重ねた結果、FETの規格のバラツキはセレクトすることにより解消でき、充分製品に活かせるという結論に達し、今回のDMA-X1に採用することにいたしました。ドライバー段や初段にもFETが多用されている事はいうまでもありません。又、能動素子(トランジスター等)以外の素子にもスタックスの数々のノウハウが込められています。例えば抵抗やコンデンサーにはタンタル抵抗やドイツ製の積層コンデンサーを採用する、又配線材としてLC-OFCやPC-OCC、QFC等を適材適所に使いわける等です。マッティエ・オタラ氏の提唱したトランジェント・インターモデュレーション歪も測定の結果、極めて少ない事が確認されています。さて付属機構です